

# 針葉樹會報

1975年9月復刊44号



目 次

表紙写真

那須甲子行

鈴木 英雄…1

いやだよ山ダニ君!!

柿原 謙一…2

大菩薩から丹波山村

宮城 恭一…3

登りましたよ四阿山

山田 亮三…6

サンジ小舎

久保孝一郎…8

会員便り

石井左右平…10

会務報告

幹事…11

赤石岳(三、一一〇m)

「川は天竜、山は赤石……」と  
俚謡にもうたわれている赤石岳は  
やはり天下の名山であり、日本の  
数少ない三千メートル級の山のな  
かでは、実に堂々たる山容をもつ  
ていると思つてゐる。私は多年、  
東から西からこの山を遠望しては  
その山頂につつ日のことを考えて  
いたが、偶々還暦の年令につつし  
た年、聖平から聖岳を越え、兎岳  
にかかつた附近から写したのがこ  
の一枚。さわやかな夏の日だった。  
但し翌日赤石岳の山頂につつた時  
は、百間平まで遠望のきいた天氣  
も遂にくずれて、霧のため視界は  
せまかった。それでも一等三角点  
標石をなでながら、私の心のふく  
らみは決して小さくなかった。  
(一九七四・八・十六、昼頃撮影)

那須甲子行

鈴木英雄

五月下旬の金曜日朝、久保君と上野を立ち、三倉大倉の山々を暫く見渡して又一寝入りし新緑とつゝじの那須野を通って十一時ロープ

駅でバスを降りた。鳴り物入りの車内スピーカーには悩まされた。戦前、亡友山口稔一君（昭七）と大丸から朽ちた木管に沿って登ったことを思ひつつ峠に向う。高曇りで絶好の日和である。峠から朝日岳へ二本の雪渓を横

切って中学生の列が続いている。女の子を背負って下りてくる先生に会う。峠で中食の後、茶白岳往復。茶店はこの頂上に移動しロープの客ちらほら。県営避難小屋は二段式で、附近で二、三人竹の芽を掘っていた。

— 1 —

三時、三斗小屋温泉大黒屋着。百年を越す宿の柱も浴槽も黒光りし、外に客はなく正に仙境である。夕食に出た新鮮なわさび漬は逸品であった。六時に床を敷く。夜半、月明の

三倉大倉の山々を暫く見渡して又一寝入りし曉を覚えず。今日は土曜、亦好天氣である。

隠居倉を越え清水平迄に三時間と倍かかったが牛歩のマイペースに辛抱してもらう。三本槍は尖った山ではないが、頂上は白河、会津、下野三国境の接点であり、各藩で槍を立て、境界の確認をしたことから山の名になつたといふ。この辺りは往時の巡視路で笠松峠附近の這松の列は並木であろうか。その立派な松の根本で中食。食欲振わざるも久保君に促されてようやく済ませた。坊主沼附近は残雪深く沼も埋まっている。雪の丘を歩いて気分転換す。三人組と前後しつゝ甲子山を越え、新緑の中を甲子温泉に降る。

古い湯治宿はなく樂翁公の信仰した甲子大黒天祠が残っていて、コンクリートの宿屋も

大黒屋という。温泉で汗を流し宿屋のバスに便乗して白河駅に着いたのだが、二人共発車時刻表の十七時を午後七時と錯覚して、ぶらぶらしているうちに臨時上り最終列車を逸してしまった。白河駅に化されて頭にきたが、今は一時半の夜行以外はない。ふくろうの声を聞きながらリュックを枕に待合室のオカンをすることになった。

白髪重来一夢中、青山不改旧時容。わが春はむかしの春ではないが山は又新緑であつた。



# いやだよ 山ダニ君!!

柿原謙一

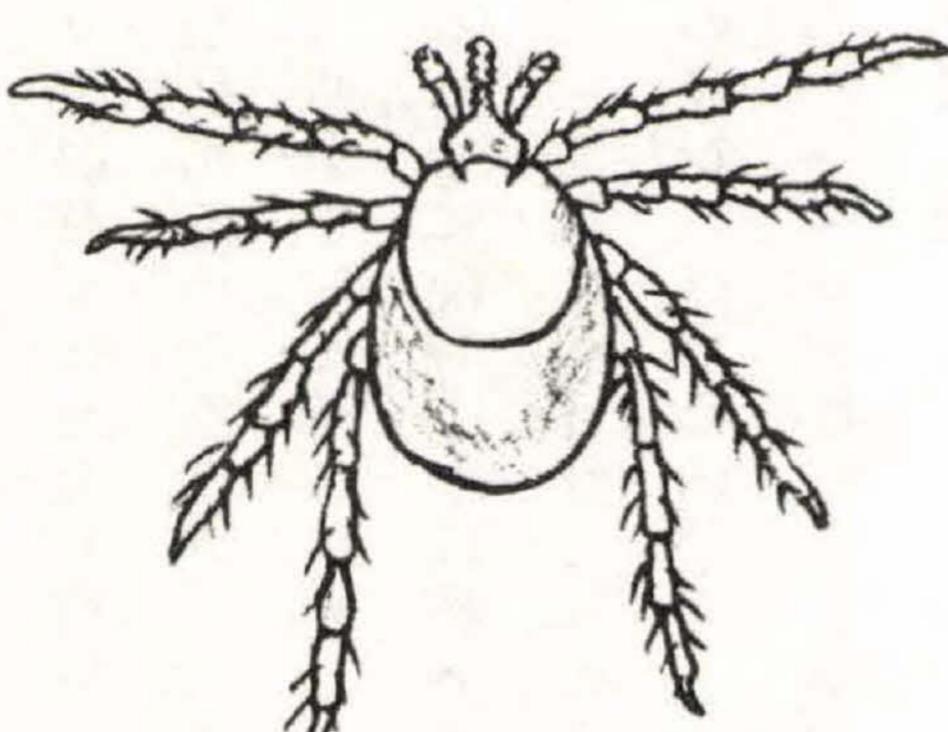
週休二日の六月十四・十五日だが、十五日は伯父の年回なので、十四日だけでどこぞに登ろう。さて、と考へて昨年秋雨で中止した赤城の黒檜山とする。ここなら梅雨にやられても大洞でパイ一、そしてUターンすれば可。この料簡がいけなかつた。雨もふらずに薄日もさして登頂できたものの、山ダニにやられたのである。

前橋発九時二十分の大洞行き東武バスは空いていた。裾野にかかる赤城はみえず、曇天。雲を抜けてゆくと明るさがまし、牧場にくると牛があそび、つづじが赤い。黒檜山もよく見える。十時三十分大洞に着いた。大沼の東南端から駒ヶ岳への登りとなる。稜線にたち、ついで小突起をこえて黒檜山への鞍部にくだる。この間笛におわれた稜線を歩き、笛をわけるのが妙に不快であった。

御黒檜山大神石碑を拝して北端の黒檜山三角点につく。昼食はパンと罐ビール。遠望はなかつたが外輪山はよく見えた。晴れている。

湖畔道へと降る。この間もときおり熊笛をわかる。イヤな感じがする。車道にて赤城神社のわきをすぎ大洞バス停に着く。十四時五十分発の前橋行きは間もなく出発。また新坂平で牧場の牛を眺め、尻尾をふっている馬の姿にほほえむ。これであの笛道でのイヤーな予感を忘れ去つた。

前橋駅に着いて両毛線発車までの三十分間を、ティールーム「白樺」に憩う。このころ右肩が何となく重いと感じた。軽い登山袋で右肩だけ疲れるとは変テコだなと思つたが、コーヒー一杯飲んでそのまま車中の人となつた。



ヤマトマダニ

してから晩酌少々。そのあと寝込んでしまつたが、翌朝目覚めて腕を伸してから驚いた。右腋の下に腫れ物にさわるような痛さがある。

さぐるとふくれている。洗面所の鏡でみると小豆粒大の赤黒い腫れ物がみえて、うみはない。季節とは申せ一夜にしてこんな不出来な出来物ができるもんでしょうか？

長女がおきてきたので、「おかしいから一寸みてくれ」とたのむ。のぞきこんだ娘が、「何でしょうね、おかしいわ」ときた。しばし眺めていたが突然、「お父さん、脚がうごいている。これはアレよ!! わたしの山友が首根に喰いこまれたことがあるわヨ」と大声をあげた。「これは引っ張つても駄目。ちぎり

れて頭がなかに残るわよ」

伴もやつてきた。「山ダニだア」

雲取山の鎌仙人の愛犬の腹によく喰いついて、小豆粒大の赤黒色の腫れ物をつくった奴がこやつである。「あ奴か!!」と親爺は合点できた。いやだよ山ダニ君!!

早速えぐりとるほかあるまいと、日曜急患診療医をしらべたら、旧知のHさんの外科病院がリストにあつた。長女が「うちのお父さんが山ダニに喰われたので、これからすぐに参ります」と電話した。山ダニと外科——い

ささかきまりがわるいが致し方なし。病院にゆくと若い二世が診療室にいた。曰く「僕も

山岳部にいましたが、これをみたのははじめ

てです」と。そうでしょう、小生の山行譜一九五回目での初経験である。たつた一匹のくせにこのダニ公め。

「切開して頭から取り出してほしい」

「勿論します」と、軽い局部麻酔のあとでメスを入れた。「しつこい奴だな、なかなかとれない」、「アア取れた、コ奴です」。

肌に露出してたという黒い羽状の脚が印象に

残った。ヤレヤレである。

「一針ぬいました。明日また見せて下さい」は?」「イヤア、赤城の筆ぐりで」と答えて笑われる。入浴許可がおりるのに一週間を

がよく判つた。喰いついて離れない。

数日おいて第三回目の診療のときはH院長

(一九七〇・六・二二)

さんであつた。「どうしたんですか、ダニと

て丹波から柳沢峠への道が青梅街道を下

る。明治十六年に柳沢峠を越える街道ができる。

その後この丹波道はあまり利用されなくなつたとのこと。しかしこの山路は昔の街道であつただけに、あまり起伏がなく、歩き易い。

樹林帯の中を「れんげつつじ」が所々に群生して美しく咲いているのを見ながら歩く。

一一・三〇「フルコンバ」に着く。屋根だけの小舎がある。何故このような名前が着いて

なる。九・五〇 大菩薩嶺に着く。大勢の登山者が居た。峠までは草原で時々雲も晴れる。

いるのか不思議である。一二・一〇 ノーメ

## 大菩薩峠から丹波山村

宮城恭一

六月十三日(金) 新宿—塩山—裂石 夕方

裂石の宿に一泊。

六月十四日(土) 六・〇〇 宿を出て丸川

峠へ向う、途中砂防ダムを越える所で悪い所

がある。曇天で時々薄日がもれる。八・三〇

丸川峠、この峠まで出会った人は皆無。丸川

峠から嶺までの道は樹林帯で長い。道標が少

なく道を間違えているのではないかと不安に

なる。九・五〇 大菩薩嶺に着く。大勢の登

山者が居た。峠までは草原で時々雲も晴れる。

ダワに着く。「ダワ」は判るが「ノーメ」と

つた。

は何だろう。この街道には「フルコンパ」と  
言い「ノーメダワ」と言い面白い地名がある。  
(この由来を教えて頂ける方がいれば幸甚に  
存じます。)一・〇〇 追分に着く。これま  
では薄暗い樹林帯であったのが、ここからは  
見透しのきく開けた谷になる。しばらく下が  
った所に屋根だけの小舎がある。この辺の谷  
を「わさび谷」と言う。山腹をまくようにし  
て行くと尾根の鞍部にある「藤ダワ」に二・

〇〇に着いた。ここまで全く一人で歩いて来

たが、後ろから一人学生らしい登山者が追い  
ついて来た。藤ダワで道は二つに分れ右にや  
や広い緩やかな道を下れば旧青梅街道である。  
所が道標には左が近道で貝沢を経て丹波へ出  
る所ある。つい近道を取ってしまったが、道  
は急峻な下降となり、足の痛いこと痛いこと。  
急がばまわれとはよく言つたものだ。三時に  
丹波に着く。バスは三時過ぎに出ると確めて  
来たのに、その便は当日はなく何と一時間半  
もまたされ四時半にバスに乗る。しかしバス  
停の前の茶店で飲んだビールの味は最高であ

大菩薩嶺から峠までの間は銀座のような人  
ばかりだが、あとは静寂そのものの一人旅。

追分を過ぎてわさび谷を歩きながら、時々雲  
が晴れてうつすら見える奥秩父の巨大な山容  
には感激させられた。

## 木曾駒ヶ岳

今年は梅雨が少し早目に終るだろうと思ひ  
たが、後ろから一人学生らしい登山者が追い  
ついて来た。藤ダワで道は二つに分れ右にや  
や広い緩やかな道を下れば旧青梅街道である。  
所が道標には左が近道で貝沢を経て丹波へ出  
る所ある。つい近道を取ってしまったが、道  
は急峻な下降となり、足の痛いこと痛いこと。  
急がばまわれとはよく言つたものだ。三時に  
丹波に着く。バスは三時過ぎに出ると確めて  
来たのに、その便は当日はなく何と一時間半  
もまたされ四時半にバスに乗る。しかしバス  
停の前の茶店で飲んだビールの味は最高であ

が手に取るように見える。しらび平から千畳

敷までのロープウェーはぐんぐん高度を上げ  
て勞せずに二七〇〇米まで登ってしまう。冷  
氣あふれる千畳敷のカールはさすがに見事で  
ある。小型の穗高涸沢といつた所。

翌日十九日午前四時半に御来光を見る。午

前七時女房を宿に残して単身「極楽平」に向  
う。雲一つない晴天で、南アルプスや富士山

が良く見える。四十分程で稜線へ出るとそこ  
が極楽平だ。木曾御岳が正面に見え空木岳、  
檜尾岳、三ノ沢岳の山々が目の前にそびえる。

七月十八日木曾駒千畳敷山荘と十九日駒ヶ根  
高原の旅館に夫々予約をしておいた所、図に  
北アルプスの南部乗鞍あたりまでが見えるが  
北部アルプスはこれから登れば見える筈。が  
っかりしたのは登山道がすべて黄色のロープ  
で両側をかこつてあり、道以外は歩くなとの  
こと。高山植物保護のためである。宝剣への  
登りはしばらくはだらだらの登りで平坦であ  
るが、岩場へかゝると切り立った岩稜となり、  
飛驒側、信州側共に深く切れ込み、見下ろす

雷雨で道路が崩れ、開通は午後一時と言うこ  
とで、二時間近く駅の周辺で待たされてしま  
つた。駅の前からも木曾駒「宝剣岳」の偉容  
が手に取るように見える。しらび平から千畳  
敷までのロープウェーはぐんぐん高度を上げ  
て勞せずに二七〇〇米まで登ってしまう。冷  
氣あふれる千畳敷のカールはさすがに見事で  
ある。小型の穗高涸沢といつた所。

ティは空木の方へ縦走すること。岩場のスリルを楽しんで宝剣頂上へ着いたのは八時半、さすがこの岩稜には例の黄色のロープがなかつた。宝剣から宝剣山荘への下りは大したことなし。中岳を登り木曾駒ヶ岳頂上へ着いたのは九時半、素晴らしい眺望（北アルプス全部が見える）を満きつして帰途につく。下りは宝剣に登らずに千畳敷へ直接下る。

特筆することは（一）、すばらしい晴天にめぐまれ眺望を満きつしたこと。（二）、高山植物の豊富なこととその美しさ。（三）、これはがっかりさせられることであるが千畳敷周辺と駒ヶ岳周辺の道にはすべてロープがはりめぐらされていること、であつた。

## 木曾御岳山

七月に木曾駒ヶ岳に登つて、木曾御岳山を見たとき、無しょうに登りたくなつた。八月六日から四日間の休暇がとれたので、早速早晨の汽車で木曾福島へ。バス終点の田の原に

着いたのが二時頃。その日の午前まで良かつ

た天候が悪化し、田の原では小雨が降りしきり陰うつな情景であった。田の原の宿はすべて満員で、頂上王滝小舎まで登らざるを得ない。霧の中を八合目までは何と言うこともなかつたが、それからは雷、雨共に激しくなり、雨は横から下から吹き上げ、稻妻、雷鳴は所

きらわすと言つた有様となつた。ハイ松地帯のため雨やどりする場所もなく、登るより外は仕方がない。やつとのことでずぶ濡れになつて九合目の避難小舎に着く。十人位腰を下ろせば満員になる小さな小舎に二十人位は入つていたか。一時間以上天候の恢復を待つたが好転する気配はない。頂上小舎から数人のアルバイトの学生が雨具に身をかためて下つて来て、「倒れた人が出たとの知らせだが見なかつたか」と聞く。「そう言えば數組の登山者をおいたがまだ着いていない」と答えると彼等は飛ぶようにして降りて行つた。

小降りを見はからつて頂上王滝小舎に着いたのは六時頃か。女性とおぼしき三人がアルバイト学生に背負われて小舎に登り着いたのは

そのあと。遭難者は無かつたようだ。

翌日も天気が悪く、ラジオによると寒冷前線の南下で青森県、山形県に豪雨被害が出たこと。もう一日滞在するつもりで居たが、午前十一時頃から雨が上がり明るくなつて来た。身仕度をととのえて小舎を出る。霧の中を王滝頂上にお参りし、二の池へ向う。段々天候も良くなり、三の池ではその素晴らしい景観が姿を現した。あまり人の歩かない三の池の北側尾根を歩く。この尾根からは四の池の湿原が右側直下に見える。右に四の池、左に三の池その背後の雪をつけた山容を見ながら歩く。この尾根は素晴らしい。三の池では大勢の行者が「びん」に水を汲んで頂上へ引きかえして行く。信心とは言え大変なアルバイトであろう。

飛驒頂上に着いたのは二時半頃か。小さな五の池を見て濁河温泉ニヨリヨへと下る。この下り道は良く整備されていて、森林限界から下はずべて丸太を敷きつめてあると言つて過言ではない。しかし却つてすべり易く、神経がつかれる。のぞき岩、お助け水、仙人の滝を経て時

夕日のもれる濁河温泉に着く。キャンセル続出とのことで閑散とした温泉に一夜を過ごした。

濁河温泉から飛驒小坂までのバスは一時間

半を要するが、途中の景観は御岳が右に左に見え、深い谷の中腹を走る。よくぞこれだけの道路を作ったものか。バス旅行の終りに近い頃、美人の車掌さんが、ここが巖立ガンドテですと教えてくれる。

昨夜濁河温泉に泊つて宿の主人と話していって驚いたことは、飛驒側の人々は御岳山を木曾御岳と言わないで、飛驒御岳と言っていることだ。私はその証拠にこの宿のマッチを持つて帰つた。それは「○○荘、飛驒御岳」と明らかに印刷されている。

久しぶりに夏の雷雨の恐しさを悟らされた山行であった。

昭和五十年三月二日。無風大快晴。

大明神沢を渡つて四阿山の本体にとりつく

はじめの頃は、時々物すさまじい風音がして、これはしごかれるかなと覚悟をしていたが、

登るほどに風はおさまり、まさしく絶好のスキー登山日和となる。

にもかかわらず僕にはまだ不安が残つていった。大丈夫かな。本当に頂上まで行けるのかなー。

天気についての不安はなくなつたが、意外に僕の心は弾まない。体力についての不安がない。同行の柿原さんはもう還暦をすぎた筈はない。一昨年の二回目の時のように、空しく残っていたからだ。昔から登りは弱かつたが、近年は酒とタバコのノミすぎで、体力の衰えが著しく、ますます登りに自信をなくしていく。

でだからして確信がなかつた。たまたま選んだ三月二日に、山が晴れるという保証はない。一昨年の二回目の時のように、空しくゲレンデ・スキーに終る可能性は強い。同行を約した柿原謙一さんからの御便りも「こんどダメなら新緑の頃にでも登るべく」という心細いもので、断じてスキーで登頂するといふ氣持は、二人ともいささか薄らぎはじめて暫らくしても追払うことができずについた。

## 登りましたよ 四阿山

山田亮三

いた。

柿原さんが三回目、僕が四回目の試みであつてみれば、ある程度までムリはあるまい。

だが山は見事に晴れてくれた。雪質も去年にくらべてグンとよろしい。



途中一休みした時、ショッピリその不安を倉知君にもらすと、

「何をいなんですか。こんな日に頂上を踏まぬぐらいなら……」

山登りなどヤメチマエといいたかつたのだろう。ほかのことは知らないが、この人、こと山に関してはきびしさがありますな。だからこそあれだけの登山家になれたわけであろうが、前にも彼に一喝を喰つたことがある。

昭和四十二年の十二月末。当時失業中の倉知君と一緒に、ロープウェイで千畳敷に登り、そのまま宝剣岳に向つた。まだ山登りを復活させたばかりの頃で、アイゼンをつけての冬山など全く久しぶり。頂上直下でいさか恐くなり、もうここらで止めておくよといったら俄然として倉知君怒りましたな。絶対登らねばダメだと大喝一声。おかげで厳冬期の宝剣岳の頂上を踏めたという昔話があるが、そんな倉知君であるだけに、僕の弱気がはがゆいらしい。おまけに今回は、どうしても僕を頂上まで連れてゆけと中島寛君の嚴命があつたそだ。

そうか中島君がそいつたか。ナルホドネ。昨年の四阿行での中島君は、実力からして總リーダーたる立場にあつたにもかかわらず、僕たち足弱連など見むきもせず、真先かけて突進し、ついて来れるものだけついて来いといふガメツさで頂上まで行つた。二回目の彼が三回目の僕をさしあいて登頂したことに、いささかのうしろめたさがあつたわけである。

前科一犯である。

いや中島君にはもう一つ前科がある。昭和四十六年三月の第一回目の折のことだ。先行した倉知君と僕を追つて、その夜菅平白樺荘にあらわれるべき彼が、またどくらせどやつてこない。やむなく翌朝倉知君と二人で出発。小四阿山へ去年僕たちが名付けた四阿山八合目は、深田久弥さんによれば小四阿山とある。大先輩にしたがいましょう」をこえたところで熊に逢い、一も二もなく退却した。

小四阿山をこえても僕の不安はまだ続いた。あそこから急登になる。持病の足がつ・くせ熊であつて断じてカモシカではない。だが熊であつても、中島君がもし一緒にいてくれたら、あれほど簡単に退却したかどうか。彼ならまづ熊に見劣りしないし、万一の場合は、

時間もまだ早い。もう少し頑張りましょう。

中島君が熊と格闘中に僕らがサッと逃げだすという手もある。おそらく三人揃つていれば、五年の歳月と四回の試みをまつまでもなく、四阿山はあの時パッチャリと登れていた筈だ。

その重責をおう中島君が、何だかパッとしない理由で予定の汽車に乗遅れ、僕らが退却して小四阿山の下りにかかる頃やつと合流した。

どうやらこうした歴史的事実の累積のうえに、中島君の嚴命が生れたらしいが、命令された倉知君には迷惑な話だ。どうしても連れてゆけといつたところで、赤ん坊ではあるまいし背負つて上るわけにはゆかぬ。おそらく倉知君の心境は、弱い馬をあてがわれながら優勝を嚴命されたジョッキーのそれであつたにちがいない。

あえぎあえぎの急登が終つて上の台地にでると、傾斜がグンとゆるくなり、美しい乳房のような頂上がはじめて姿をみせる。この時である。ああこんどこそ登つたなどという確信が湧いたのは。

先行した倉知君と和夫君が、樹氷の下で紅茶をわかしてくれる。昼食にする。その折の謙一宗匠の句を二つ。

紅茶わかす樹氷かこみつ脚のべて

樹氷より氷のつぶて紅茶わく

そこから頂上までは意外に近かった。南北に長い頂上の一角、上州祠の横にまず和夫君が立つ。続いて倉知君、柿原さん、僕と、登りに強い順に登頂。そこから信州祠までのヤセ尾根は、去年はスキーをぬいだそうだが、今年はスキーで自由に歩ける。

柿原さんとガッチャリ握手。会報三十九号の「いづれ胸のすくような頂上に立つ日があるでしょう」との柿原さんの言葉が、文字どおりに実現したわけだから、何とも嬉しくて仕方がない。弱い馬がよく走ったと、中島君への責任を果した倉知君も満足そうだ。和夫君

は昨年に続いて二回目の登頂という果報者。

三百六十度山岳大展望を満喫しつくしたあと、シールをとつて下りにかかる。やはり倉知君のスキーはうまい。和夫君もここ一と二年でグンと腕をあげた。ロートル二人との格差は大きいが、敬老精神にとむ二人は時々立ちどまつて待つていてくれる。それでも雪が良いので去年よりはるかに楽だ。小四阿山は中腹をまく。

急峻な斜面の長いトラバースで一寸いやなところだが、下がひらけているので恐さがないくて助かる。

それから大明神沢左岸の台地までの滑降は良かつた。スキーのうまい二人はスッ飛んでしまつた。残りの二人はボーゲンにキ

ックターンをおりませて慎重に下る。だんだん傾斜が緩くなつて回転が楽になり、最後は直滑降一発。面白いほどスピードがでて、登りにあれほど苦労したところをアッというまに下つて了う。スキー登山のダイゴ味であろう。

台地に四人集結し、大名神沢を渡つて宿に帰つたのが四時前であつた。山行担当幹事の責任から待つていた池知君も加えてビールで乾パイ。ビールが終るとウイスキー。街で飲む酒はホロにがいが、山での酒は何でこんなにうまいのか。急激に深まつてゆく酔に身をまかせながら、登りましたよ四阿山、登りましたよ四阿山と、僕は胸のうちで何回もくり返しつぶやいた。

中村讚治が逝つてからもう十余年、彼の型破りの動行とともに、想い出されるのは、こ

れまた大変風変りな彼の父、為治先生（通称タメさん）である。そしてまた中村家の国立

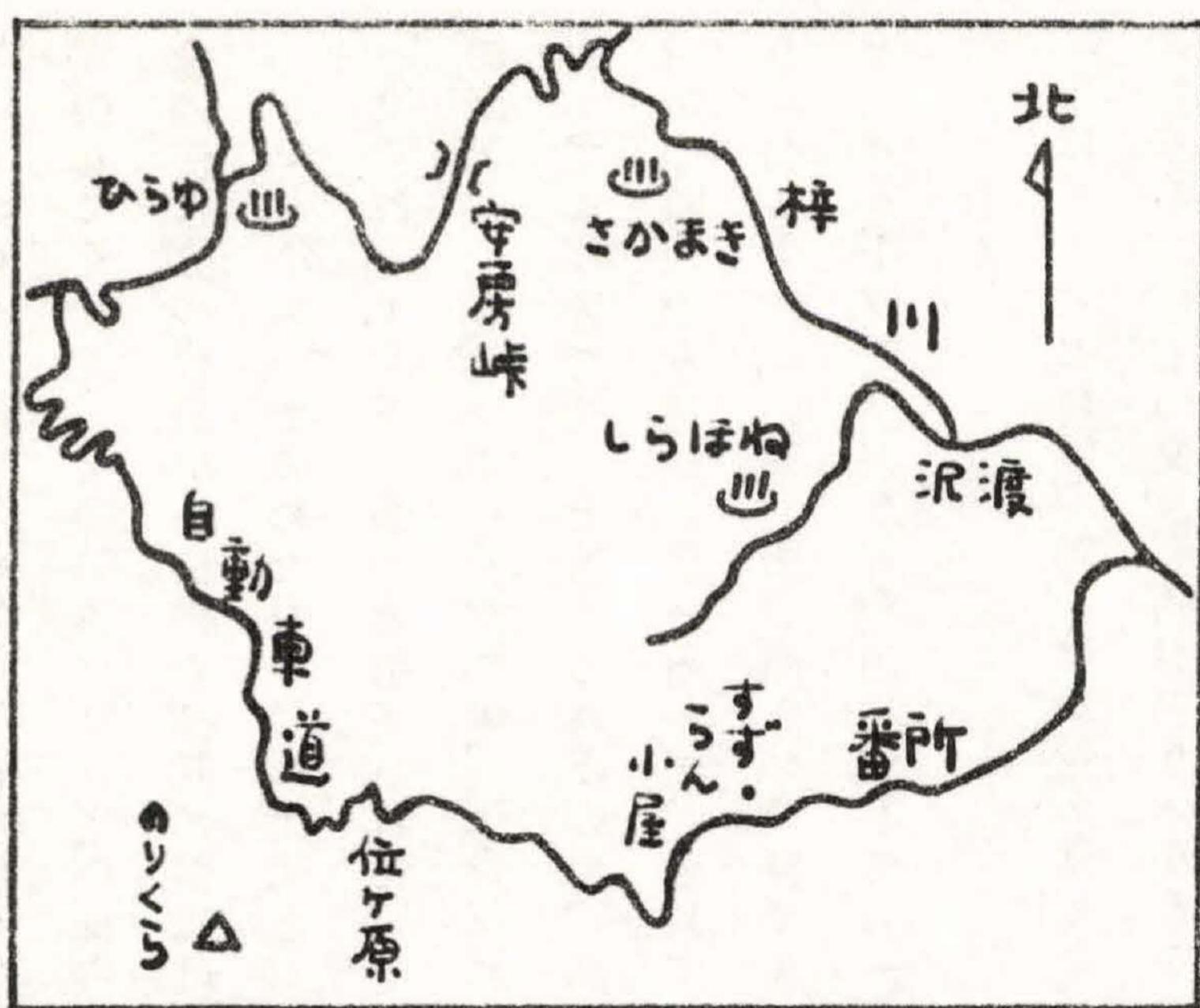
## サンジ小舎

久保孝一郎

の櫟林からの転居先、番所の高原と乗鞍の雪の斜面とタンネの森である。

僕も子供が大学最高年となると、タメさんとのサンジを失った気持も、二人を知っているだけに、俗に世間の親など以上に、よく分る積りだ。そして上高地や安曇野を歩くついで

に、一度はタメさんを訪れてサンジの靈を慰めたいと思いつつも、これまで果していなかつた。一つには、僕自身が俗事に追われてあ



つにはタメさんがミザアントロープとも言うべき嫌人的性格で、安易な気持の他人の訪問を拒否されるのではなかろうかという一抹の危惧である。

今年のスキーシーズンは僕は良き仲間に恵まれてツアーレイド。根子岳には一度登つたし、苗場神楽峰から木曾屋敷、会報前号記載の東吾妻、さらに五月連休には尾瀬燧ヶ岳から鳩待峠まで滑りまくつた。その余勢は何処か滑り納めの山を考えずにはいられない。たまたま送られてきた会員名簿物故者欄を見ると、サンジの命日は昭三六・六・六とあるので、この日にタメさんを尋ねれば、よもやいくら御機嫌が悪くても門前払いを喰うことはあるまい。しかし小心の僕は、肩ノ小舎から位ヶ原山荘への滑降が梅雨時の濃いガスでもかかると不安だし、タメさん訪問にも心強いからと同行者を探したところ甘利君が応じてくれた。

ただし彼の都合で出発は六月七日、夜行離京、八日朝訪問となつた。現地でまごつくと

いけないので、タメさんは終戦直後まで予科の英語の先生をしていたからと如水会、小平、國立の学校事務局に照会したが不明。もうそれから約三十年経過、まったく番所の住民となつてゐるから分るだろうと、靈前供物特級酒一本をリュックに入れて出かけた。

早朝、新島々駅では梅雨の曇り空であつたが、バスで番所の部落に入る頃は梅雨の中休み、雲はきれ陽がさした。番所の中心地となると、二つ先バス停「檜ノ木坂」前だそうで、幸い部落住民の自家用車に便乗させて貰つた。そこに築後間もない現代風小住宅があつて、タメさんの新居である。僕らは名乗つてサンジ慰靈訪問の旨を告げると、タメさんは欣然屋内に招じ引見してくれた。僕の危惧は幸い杞憂に終つた。会談約三十分、その内容や状況は訪問後の総会席上で報告したから省略するが、とにかく御元氣で悠々自適、美しい限

りである。

やがて僕らは室内壁間に懸るサンジの写真像に黙禱を捧げて、その屋を辞した。タメサ

ンは至近のバス停まで周囲の説明をしながら案内してくれた。その時タメサン宅の側の建物の傍に立つ標識板が白樺の樹間に僕には、「ケンジ小舎」と読めたので口に出すと、タメさんは「サンジ小舎」と訂正された。その由来を聞くと、「サンジの死後、彼の友達が寄ってこれ建てた」と答えられたので、高師付属中時代の友達かと思い当つて、重ねてそう尋ねると、「いや、彼の商大卒業後できた友人グループだ。どうぞ利用して下さい」と答えられた。

僕はジーンと目頭の熱くなるのを覚えた。と言うのは、その交友範囲がどういうものに

せよ、僕ら山岳部OB会がこれまで散々山小舎を持とうとかどうとか色々ことあげしてきただが、本当に持つ氣があるなら、これが良いお手本、すでに出来ているはずである。(管理上の問題やら、持てば山行を一地域に限定されがちになるという問題等は別としても)また、サンジの番所の自然美への傾倒と着目の良さ、さらに、サンジは僕らの間でも愛すべき快男児、奇行の持ち主であったが、彼の

一橋山岳部卒業後にできた、その仲間うちでも彼は愛され、追慕され、その念が結晶してここに「サンジ小屋」が具現したであろうことを想像すると僕は感無量となり、番所のタメサンまでの慰靈訪問の良き記念となつたとつくづく思つたからである。

さて、そのサンジ小舎、現地での管理はタメさんだろうが、その使用管理規程がどうなつてゐるのか、別に訊きもしなかつたが、その後情報が入れば分ることとし、その道路反対側に白樺ヒュッテとか称する民宿があつて、バス停でタメさんと分れてから、僕らはそこに入つて朝食をとつた。

それからバス、タクシー、トラック等をのりついで、平湯から山頂バスター・ミナルに達し、肩ノ小舎まで登り、位ヶ原山荘まで滑降、一泊。翌日山荘、頂上間をスキーで往復しました番所に戻り帰京した。天気に恵まれ、まことに楽しいスキー納めであった。

最後に会員諸氏に提案したいのだが、来年ヨイ組は三段リフトを利用して位ヶ原山荘まで。昔のスキー合宿を追想して貰い、ノンスキーグループは白骨温泉まで雪中ハイクとはいがが、メサンまでの慰靈訪問の良き記念となつたとなものだろうか。これから準備するから希望者の申込みを待つています。

## 会員便利

石井左右平

前略。毎回、針葉樹会報を御送り頂き、心から御礼申し上げます。

アメリカくんだりで会報を読むと、自分が違つた世界にほうりこまれてしまつて居るみたいで、早くみんなの処にもどり度い気持がいつもします。四十二号の山行表を見てみると、全くみなさん大変なものですね。まああれだけ山に行ける年代になつたと言えるかも知れない。

小生、昨夏、キャナディアン・ロッキーに行つたきり、山に近づいていません。カナダ

三月彼岸ごろサンジ小舎か白樺ヒュッテに泊して、サンジ追悼の酒宴を催したいことで

では可成りの観光客でしたが、少し奥に入る

追伸

小生の勤務先及び住所は

JAPAN FOOD CORP. 445 KAUFFMANN  
COURT SO. SAN FRANCISCO,  
CA. 94080 U.S.A.

ました。きれいな素晴らしい處です。大分歩き廻りましたが、ふだん毎晩酒の生活にもかかわらず、意外とへばらないので、やや自信を得た次第。毎朝、ワイフにぎり飯をつくりせて、小川のほとりで食べる昼飯が本当に楽しかった。

Lake Louise という有名な所があつて、

湖のほとりに立派なホテルがありますが、そ

のずっと奥の山の中に Ten Peaks というのがある。11000 m 位の処に素晴らしい峰があり、その眼の前に十の峰がずらつと並ぶ。北尾根を横に並べた様に。

Canadian Rocky に行く人は大て Lake Louise へ寄るでしょうが、そこから五六時間かけると行けますから、是非行って見て下さい。ただ、どこも蚊の多いのには驚きました。

○議事 年次総会提案事項の審議

### 一九七五年度・年次総会

○日時 六月二七日(金) 六時半

○場所 如水会館 南北日本間

今年は今迄、色々あつて何も準備してなかつたので、今、さて此の夏は、と思案して居るところです。皆様に宜敷く。

### 会 務 報 告

西牟田 伸一

電話 (415) 871-1660  
自宅 1766 29th Ave. San Francisco  
CA. 94122

電話 (415) 665-1672

留守宅

東京都小平市上水南 697

電話 (0423) 21-5333

○場所 如水会館 会議室

○出席 望月達夫、岩崎利一、松木謙三、

手塚晴雄、山崎拡、倉知敬、竹中彰、

池知昭洋、加藤正己、中村雅明、

西牟田伸一、(学生)前神直樹、

藤本敏行、加藤博行、兵藤元史、

松田重明

以上一六名

○議事 年次総会提案事項の審議

### 一九七五年度・年次総会

○日時 六月二七日(金) 六時半

○場所 如水会館 南北日本間

○出席 吉沢一郎、松木謙三、増山清太郎、鈴木英雄、黒田正治、柿原謙一、望月達夫、佐々木誠、岩崎利一、

宮城恭一、佐野茂雄、久保孝一郎、

針葉樹一四号編集 倉知 敬(新)

中島 孚(留)

樋口洪、山崎拡、勝田有恒、

昭和 16 ~ 30 年 日江井正己(〃)

甘利仁朗、渡辺嘉佑、中島寛、

小林茂雄(新)

原博貞、吉川晋平、加藤正己、

笠原広信(〃)

中村雅明、松尾信孝、井草長雄

伊藤慈生(留)

学生数名

奥野巖根(新)

○議事

- (1)七四年度活動報告  
(2)針葉樹会七四年度決算報告及び七五年度予算(別表)——承認

また、山岳部で針葉樹一四号の発行が計画されているので、O B側の編集幹事を新設することになった。

なお左記の各氏に顧問をお願いする。

総務 望月達夫

会計 原田豊、伊藤慈生、吉田義則、

- (3)一橋山岳部七四年度決算報告及び七五年度予算(別表)——承認

左記の幹事が改選、承認された。

代表幹事 中島 寛(留)

上原利夫、渡辺嘉佑、

会報 久保孝一郎

学生 中島寛

- (4)任期満了による幹事改選  
(5)評議員の改選

- 評議員は留任を含めて左記の各氏

- (6)山岳部部室の修繕

小林茂雄、甘利仁朗、中村幸正、三氏を幹事として募金を集め、早急に応急修理を行なう。募金の納入状況に応じて長期的修理計画に移すが、この点は幹事と学生に一任。

- (7)針葉樹一四号の発行

倉知編集幹事と学生を中心に、創部五〇周年を記念して発行できるよう準備に着手することを承認。

- 会計 中村雅明(留)  
会報 井草長雄(留)  
学生 加藤正己(新)  
同 松尾信孝(新)

昭和 3 ~ 15 年

手塚晴雄(〃)

※注 これまで山行幹事がもうけられていた

昭和 31 ~ 50 年

中島 孚(留)

日江井正己(〃)

小林茂雄(新)

笠原広信(〃)

伊藤慈生(留)

奥野巖根(新)

甘利仁朗(留)

渡辺嘉佑(〃)

澤木一夫(新)

三井 博(〃)

長沢道彦(〃)

原 博貞(〃)

岩崎利一(〃)

松木謙三(〃)

## 針葉樹会会計報告

( '74.6.1 ~ '75.5.31 )

項目		73年度決算	74年度決算	増減	75年度予算	備考
収入	前期繰越	40,849	24,479	△ 16,370	37,832	
	会費	412,000	700,500	288,500	570,000	
	利息他	32,410	1,307	△ 31,103	1,300	
	計	485,259	726,286	241,027	609,132	
支出	会報発行費	274,410	240,270	△ 34,140	360,000	(1)
	山岳部補助	150,000	150,000	0	120,000	(2)
	通信信費	7,630	19,450	11,820	30,000	
	印刷刷費	9,880	50,050	40,170	20,000	(3)
	事務費	7,000	11,300	4,300	20,000	
	雑費	11,860	17,384	5,524	20,000	(4)
	積立金	0	200,000	200,000	0	(5)
針葉樹事務費		0	0	0	30,000	(6)
計		460,780	688,454	227,674	600,000	
翌期繰越		24,479	37,832	13,353	9,132	

## 備考

- (1) 年4回(印刷 70,000 × 4, 郵送 20,000 × 4)
- (2) 山岳部会計報告参照
- (3) 会員名簿, はがき印刷他
- (4) 会費集金経費
- (5) 部室改修資金
- (6) 電話代, 交通費

遭難対策基金残高

570,714 円

会計幹事 中村雅明

# 山岳部会計報告

('74.6.1~'75.5.31)

項目		74年度決算	75年度予算	増減	備考
収入	針葉樹会補助	150,000	120,000	△ 30,000	
	体育会補助	30,000	30,000	0	
	部費	23,000	33,000	10,000	
	前期繰越	22,100	0	△ 22,100	
	遭難対策基金ヨリ	41,711			
計		266,811	183,000	△ 83,811	
支出	装備費	213,265	68,000	△ 145,265	
	図書費	9,190	20,000	10,810	
	医薬費	13,112	14,000	888	
	庶務費	28,560	50,000	21,440	
	雑費	2,684	30,000	27,316	(1)
計		266,811	183,000	△ 83,811	

## 備考

- (1) 山岳保険料補助、遭難対策費補助、他

山岳部マネージャー 松田重明

## 山岳部部室の修理報告

加藤博行

先の針葉樹総会において承認をいただきました部室の修繕案は、OBの方々のおかげをもちまして、このほど第一期工事（屋根の修理）を完了させることができました。紙上をかりてお礼申し上げます。

工事は八月七・九日に行なわれ、屋根の全面的葺き替え、換気扇の取付けをいたしました。大工さんの話によると、傷みは相当ひどいが使用されている木材の質が良いため持ちがいい、とのことでした。

九月からは現役学生の手で部室内の整理にとりかかり、クリーム色のペンキで板壁を塗り上げたところです。引き続き、中二階の整理、部室の外壁の塗装、窓の修理等を行なって部室の維持管理に努める予定です。

修繕費用の収支は別記のとおりになつております。募金は九月十一日現在、二十八万四千円を集めることができました。しかし、工事に要した費用は、当初の見積り約二十五万

円を十萬円ほど超過した上、今後の修繕にも約二万円かかると思われます。工事にあたつた渋谷工務店には内金として二十万円を支払ったのみですので、誠に恐縮ではあります、が不足金額を満たせるよう募金未納の会員の皆様に御協力をお願ひいたします。

來たる十一月三日には新装なつた部屋において恒例の月見の宴を盛大に催したいと考えております。OBの皆様にはお誘い合せの上多数御出席いただけようあわせてお願いいいたします。

#### 追記

募金の金額は、針葉樹会費の一年分に準ずることになつております。送金先も会費と同様にして下さい。

\*七月二十九日に、現金一万円を三菱銀行丸の内支店に入金してくださつた方、会計幹事まで至急、御連絡ください。

#### 会費納入のお願い

本年度は部室再建募金をお願いしている関係で会費の納入状況が例年に比べて相当悪い状態です。時節がら、誠に恐縮に存じますが左記まで払い込みお願ひ申し上げます。

第1期工事費用 (9/11現在)

項目	金額
屋根材	104,500
木 材	95,440
トヨ一式	20,000
運搬諸経費等	10,000
手間費	96,000
換気扇	7,500
ペンキ代他	10,000
計	343,440
募金収入	284,000

○昭和一〇年卒業まで 三千円  
 ○"一一年と三年 五千円  
 ○"三二年と四〇年 四千円  
 ○"四一年以降 三千円

#### 送金先

◇銀行振込 三菱銀行丸の内支店  
 普通預金口座  
 №002・4389520 針葉樹会

◇郵便局振込

東京183458 針葉樹会

◇現金書留

▽181 三鷹市下連雀2-4-12

中村雅明宛

部室再建費募金者

(八月三十一日現在)

柿原 謙一	五千円	中島 孝子	三千円	豊田 謙三	三千円	岡田 謙三	三千円	柴崎 新	五千円	中村 保	五千円
松浦 静雄	五千円	望月 達夫	四千円	渡辺 嘉佑	四千円	宮城 賢三	四千円	市川 陽一	四千円	西海 隼雄	四千円
佐々木 誠	五千円	榎本 直司	五千円	日江井正己	五千円	佐野 茂雄	五千円	小野 肇	四千円	市畑 進	四千円
吉沢 一郎	三千円	吉沢 一郎	三千円	高木 英二	三千円	久保孝一郎	五千円	三井 博	四千円	西海 隼雄	四千円
松木 謙三	三千円	松木 謙三	三千円	近藤 恒雄	三千円	根本 大	五千円	佐藤 之敏	三千円	山田 陽一	四千円
冠木伊右衛門	三千円	高橋 要二	三千円	高木 伊右衛門	三千円	高野 秀男	五千円	中村 雅明	三千円	市川 陽一	四千円
宇佐見敏夫	三千円	宇佐見敏夫	三千円	鈴木 肇	五千円	松下 順吉	五千円	西牟田伸一	三千円	西牟田伸一	三千円
久保田礼治	三千円	手塚 晴雄	五千円	鈴木 肇	五千円	野尻 七郎	五千円	林 正敏	五千円	林 正敏	五千円
吉沢松次郎	三千円	吉沢松次郎	三千円	吉沢松次郎	三千円	樋口 洪	五千円	高崎 治郎	五千円	蛭川 隆夫	五千円
清水 達夫	七千円	清水 達夫	七千円	清水 達夫	七千円	小林 進二	五千円	黒田 正治	五千円	深谷 光茂	五千円
鈴木 英雄	三千円	鈴木 英雄	三千円	鈴木 英雄	三千円	高崎 治郎	五千円	高崎 治郎	五千円	蛭川 隆夫	五千円
岡田 謙三	三千円	岡田 謙三	三千円	岡田 謙三	三千円	奥野 巍根	五千円	奥野 巍根	五千円	柴崎 新	五千円
中島 孝子	三千円	中島 孝子	三千円	中島 孝子	三千円	松尾 寛二	五千円	松尾 寛二	五千円	柴崎 新	五千円

計二十五万二千円

編集後記

四十四号をお届けします。

山田さんの原稿は「季節はずれじゃないのか」というのを、いわくつきの四阿山のことなんですかから是非」といって、出していただいたものです。

山ダニの図を入れようとしてあちこち調べてみましたが、なかなか見つからない。見つからないはずで、「山ダニ」というのは俗称で、本名は「マダニ」というらしい。マダニというのも何種類かの総称で、柿原さんに喰いついたのはおそらくタカサゴキラマダニというやつのようだ。

記録的な残暑となつたそうですが、そのせいで山の様子が例年と比べてどうなるのかチヨッと興味がわきます。そんなこともまじえて秋の山行、味覚などについて御寄稿くださいと願っています。

次号は十二月発行の予定です。

(井)



|||||

**針葉樹会報**　復刊第44号

発行日　1975年9月

発行人　針葉樹会　会長 望月達夫

編集人　井草長雄

〒186 国立市1-1-1 関方

印刷所　(株) 東盛社

|||||